

母国のリウマチ熱撲滅を

キルギス人医師研修中 高知市の病院

中央アジアのキルギスにまん延するリウマチ熱の撲滅を目指し、現地の医師を招いた研修が高知市九反田のいいちりハビリテーション病院で行われている。患者に特有の症状を発見する超音波検査（エコー）の技術を教えており、同病院は「高知で学んだ医療を役立ててほしい」としている。

（門田朋三）

リウマチ熱は小児の炎症性疾患。風邪のような初期症状を放置すると、炎症が関節や心臓に広がり、死に至ることもある。

医療が充実していないキルギスでは患者は10万人当たり約650人と、日本の約千倍に上る。

同病院の中島利博理事長は2006年からキルギスへの医療支援を続けており、昨年は

「一生の仕事にしたい」

心臓のエコー装置を寄贈した。

今回、現地の医師に検査法などを学んでもらおうと研修を企画。文部科学省の助成を受け、本年度から3年間で約10人を順次来高させる予定だ。

1人目の研修者はナズグル・オムルザコワ医師（41）。5月27日から今月14日まで、全身を検査できるよう特訓を受けている。

6日の研修では、超音波検査士の指導を受けながら、心臓や手の関節を検査。「中央アジアのリウマチ熱に打ち勝つことを一生の仕事にしたい」と話していた。

中島理事長は「日本では簡単に助かる病気ですが、キルギスの子どもたちが命を落としている。今後も支援を続けていきたい」と話している。



エコーの研修を受けるナズグル・オムルザコワ医師＝中央（高知市のいいちりハビリテーション病院）